

ポリティカル・コレクトネス概念のイデオロギーの利用

PC 論争からトランプへ

関東学院大学ほか 明戸 隆浩

1 目的

本報告の目的は、ポリティカル・コレクトネスの社会的文脈のうち、とくに昨年のトランプ当選に至るアメリカ政治の変遷に焦点を当て、この概念が「右派／左派」ないし「保守／リベラル」というイデオロギー対立においてどのように利用されてきたのかを明らかにすることである。

2 方法

ポリティカル・コレクトネスについては、90年代初めから半ばにかけてアメリカを中心に激しい論争が行われ、多くの著作が出版された (Aufderheide ed. 1992 など)。00年代以降は論争の落ち着きをふまえ、雑誌 *Discourse and Society* による特集 (2003年) や、Lea (2008)、Hughes (2009) など、より包括的な作業が行われた。また本格的な学術的議論はこれからだと思われるが、2016年のアメリカ大統領選挙でのドナルド・トランプ当選を、ポリティカル・コレクトネスとの関連で論じるものもすでに見られる (Ingluhart and Norris 2016; Weigel 2016)。本報告ではこうした研究をふまえて、ポリティカル・コレクトネスという概念が用いられた文脈を(1)80年代まで、(2)90年代、(3)00年代以降、の3つの時期に分け、とりわけ90年代におけるポリティカル・コレクトネス概念の急速な普及が、いかにして2016年のトランプによるこの概念の「再利用」の土台となったのか、という点に焦点をあてて分析を行いたい。

3 結果

先行研究ですでに指摘されているように、(1)80年代までの文脈においては、ポリティカル・コレクトネスという概念は、おもに左派運動内部において一部の極端な主張に対する批判ないし揶揄として用いられた。これに対して(2)90年代には、ニューヨーク・タイムズをはじめ多くのリベラルな新聞や雑誌がこの概念を批判的な含意で使い、それ自体はそれでもなお(広義の)「左派」内部の批判と言えるものではあったが、その影響力の大きさからその批判的含意が右派を含めた社会全体に浸透することになる。そして(3)00年代以降になると、この概念は右派が左派的な主張全体を批判する際に利用されるようになり、こうした用法は2016年の大統領選挙においてトランプに受け継がれたが、そこでは「一部の極端な主張」とどまらないさまざまな左派的な主張が、90年代に浸透した批判的含意のもとで攻撃されることになった。

4 結論

以上のように、アメリカにおけるポリティカル・コレクトネス概念は右派によるイデオロギー的な利用という側面が強くなっており、その射程は差別に対する批判やマイノリティへの配慮にかかわる左派的な主張全体に及んでいる。こうした傾向はトランプ当選の前後からこの概念が再び注目されるようになった日本にもあてはまるものであり、ここでの議論は日本におけるポリティカル・コレクトネス概念を考えなおす上でも、重要な示唆を与えるものとなるだろう。

文献

- Aufderheide, Patricia, ed., 1992, *Beyond PC: Toward a Politics of Understanding*, Graywolf. (=1995, 脇浜義明訳『アメリカの差別問題——PC(政治的正義)論争をふまえて』明石書店.)
- Hughes, Geoffrey, 2009, *Political Correctness: A History of Semantics and Culture*, Wiley-Blackwell.
- Ingluhart, Ronald, and Pippa Norris, 2016, "Trump, Brexit, and the Rise of Populism: Economic Have-Nots and Cultural Backlash," *HKS Faculty Research Working Paper Series*.
- Lea, John, 2008, *Political Correctness and Higher Education: British and American Perspectives*, Routledge.
- Weigel, Moira, 2016, "Political Correctness: How the Right Invented a Phantom Enemy," *The Guardian*, Wednesday 30 November 2016.